

上郡町の偉人

大鳥圭介

第二十六回「鵬程万里」 中川由香

中央アジアや中東の人々には、親日的であり、日本の制度に詳しい方が多くいます。その理由の一つに、かつてそれらの国々を支配していたロシアに日本が勝利した事が挙げられます。

明治期、列強が植民地支配の牙を及ぼす中、独立を保つには国力を育てるしかありませんでした。しかし

不平等条約で関税自主権が無い為、日本製品の市場成長は阻害され続けました。条約改正は悲願でした。しかし懸命の外交努力に関わらず、日本は後進国と見なされ続け、改正は実現しませんでした。

その状況を二転させたのが、日露戦争です。

日露戦争を勝利に導いた将星や技術者の輩出に、圭介は少なくない役割を果たしています。

圭介が二十五歳頃、江川塾の塾頭として教えた生徒には、黒田清隆の他、大山巖、伊東祐磨、中原猶介がいました。大山巖は江川塾で砲術を圭介から学び、免許皆伝を受けました。大山は戊辰戦争の宇都宮会津で

新政府軍の砲兵として、旧幕軍の圭介と矛を交え勝利し、実戦経験を重ねました。日露戦争では、陸軍元帥・満州軍総司令官として前線の指揮を担い、日本海海戦でバルチック艦隊を下した東郷平八郎と共に、陸軍の勝利を導きました。

伊藤祐磨は、新政府軍の「春日丸」艦副長として、戊辰戦争で宮古湾海戦や函館戦争を戦いました。後に海軍中将・子爵まで栄達。明治三十二年に予備役となりましたが、祐磨の弟、伊東祐亨は日露戦争で大本営幕僚長として、作戦全般を指導しました。

一方、中原猶介は江川塾で圭介から兵学を学びました。文久三年薩摩に戻り塾を開き、圭介の訳本を教科書としました。野津道貫は圭介と中原から学びました。「野津元帥の面影」で圭介は「江川塾で私は教師で、野津、大山などが生徒であった。私も貧乏書生だったが築城法等教えていた。宇都宮の戦いでは敵味方だった。年を経て野津に会い、野津が『宇都宮の戦

では貴君に大腿部に（銃で）二つ穴を開けられた』というから『ふう気味の良いことよ』と云うてやった。それから毎々出会う事となり宴会でも一緒になった」と述懐しています。他方で、薩摩の西郷隆盛の伝記「西郷南州」

は、「官軍の（宇都宮戦後の）作戦軍議で、今朝来の戦況を繰り返して語るうちにも大鳥の戦略の神のごときを褒めぬものはない。野津七左衛門（道貫の兄）は『大鳥どんの書物（築城典刊砲科新論を指す）で学んだものが、大鳥どんに向かうのじゃもの、敗

くるのは当然でござす、勝ち居ったのが不思議じゃござへんか』と言った」と記しています。野津道貫は日露戦争で第四軍司令官として、奉天会戦の主力となり戦い抜きました。ロシアの陸将クロパトキンが撤退した際、野津自身が戊辰戦争時に大鳥の旧幕軍との戦いで撤退した過去を思い出し、クロパトキンの処罰に遺憾の意を示しました。

大山・野津ら経験豊富で卓越した将官に加え、本邦で発明された新規技術も日露戦争の重要な要素でした。その一つが下瀬火薬です。炸裂時の火力はロシア軍砲弾の約六倍。主成分ピクリン酸は腐食性があり暴発が多く、欧米では使用されていませんでしたが、発明者下瀬雅允が、和紙と

ワックスを用い安全性を高め実用化しました。下瀬は、圭介が校長を務めた工部大学の化学科の生徒でした。

近代砲術は江川塾を中心として隆盛し、塾頭圭介は時代の先端を行く兵学者や兵器改良者を輩出しました。戊辰戦争、西南戦争、日清戦争等を通じて日本の陸海軍が経験を積み、技術を研鑽した結果が、日露戦争の勝利でした。また、工部大学で育った技術者による発明が、勝利に大きく寄与しました。

東洋の小国が白人の大国ロシアを破った事実は、欧米の植民地として苦しめられた各国に、感動と民族独立の自信を与えました。一方、日露戦争で約十二万人の死者を出し、国家財政は破たん寸前でした。そこまで死力を尽くさねば、不平等条約改正は為し得なかつたのです。現在は、戦争の艱難を二度と起こさないよう努める義務があります。日露戦争の勝利があつてはじめて日本は独立を維持でき、各国の尊敬を得て成長を為しとげられました。経済発展と各国との友好は、平和の必須要素です。その基盤が、今後の平和維持に繋がります。圭介の育てた人材の種は、現在の平和な国土の確かな土台になったと言えます。